

第24回 京都御苑ずきの御近所さん

株式会社植藤造園 会長(第16代) 佐野 藤右衛門 様



佐野様の日常について、教えてください。

私の日常は、目が開いたら起き、日が暮れたら眠るだけのことです。大体、朝5時くらいに起きて、まずは外へ出て庭を一回りします。帰ってきたら釜に火をつけ、お湯を沸かします。その煙の具合を見ると「今日は雨が降るぞ」とか「晴れるぞ」というのが分かります。煙の流れ方は季節によって変わりますが、下に流れる時と上に流れる時とで、天気はだいぶ違うのです。火の燃える様子を見ながら、しばらく「今日はあれをしないといけないな、これをしないといけないな」と一思案します。そして、冬場であれば夜が明けてからもう一度ぐるーつと庭を見回って、それが終わったら朝飯の段取りをするか、ちょうど出来上がった時分に帰ってきて飯を食べ、そして仕事の段取りをします。

孫の中には横浜へ修行に出ている者もいますが、今はみんな京都にいて、相も変わらず家族三世代で一緒に暮らしています。私が子どもの頃、母親は次から次に生まれる子どもに掛かりきりだったので、私は、ほとんど祖父母に育てられました。祖父とは、一緒に積み木などの遊びをしたり、何かの真似事をしてみたり、一緒にご飯を食べたりしました。子どもの頃は訳も分からず一緒にやっているだけでしたが、仕事をするようになって初め

て「あれはこうやってやるんだったな、なるほど」と思い返すことで、仕事が上手くいきます。祖父も私と同じように育ったので、古い昔の話を私にしてくれました。その祖父から聞いた話を私は孫にしますので、毎日の会話に200年くらいの時間が含まれています。今は核家族が進んで昔の話を聞く機会が少なく、知恵もなくて、目の前で見えている現象からしか物事を想像することができなくなっているように思います。

私の時代には今のような青春時代はなく、軍隊で物事はパッパとやるように言われ、ギューツと締められた生活がしばらく続きました。一番早い事柄は「早飯・早くそ・早風呂」の三原則といって、晩飯は10分くらいで済ませます。ゆっくりお酒を飲んだり、お風呂に入ったりでもしたら、相手に殺されてしまうので、常に危機感と何か起きた時の対応というものを考えて行動していました。そのおかげで、何とか今まで生き延びることができたのだと思います。

食べ物には、例えば肉でも食べたいなと思ったら食べます。昭和31年頃のことですが、パリに住んでいた時から、生魚は食べられなくなりました。当時のパリには日本人は少なく、今のように日本料理屋もなかったので、ずっと自炊をしていました。宗教の決まりで金曜日は肉を食べてはいけない日のようだったので、市場へ魚を買

いに行きました。魚は、日本のように3枚にはおろされておらず、丸々1匹で売られていて、ぶつ切りにして蒸し焼き、ソースで味付けをして食べているようでした。私は包丁も持っていなかったの、しょうがないと思いながら小さい魚を1匹買って焼いたのですが、アパート中が煙だらけになってしまい、とても怒られました。また次の週も魚を買いに行ったのですが、向こうの魚屋は日本とは違い、はらわたが飛び出していたり、目玉が飛び出していたり、土左衛門のような魚を並べていたんです。「飾り付け」という概念はないようでした。青臭い匂いが鼻につき、それ以来、生魚は食べられなくなっていました。日本に帰ってきてからも、寿司屋に行ったことはありません。

話は変わりますが、ドイツで7,8月頃に仕事をした時のこと、田舎や小さな教会に行くと、あちこちで結婚式をやっていました。日本では「ジューンブライド」といって6月のとても蒸し暑い時期に結婚式をしますが、昔はそんなこともなかったように思います。ドイツ人に「6月に結婚式をするのは、幸せになるためか?」と聞くと、「それは何ですか?」と質問されました。「日本では、幸せになれるらしいから6月に結婚式をやるんです」と言うと、「ヨーロッパのその頃は、海の漁も収穫も終わって、長い冬が明けて夏に入る、一番気候のいい時で、この僅かなほっとした合間に結婚するだけのことです。幸せになれるかどうかは、当人の問題ですよ」と言われ、なるほどなあと感心しました。日本の場合の適時は春か秋でしょうか。

また、イスラエルで仕事をした時は、食べ物ほとんど羊でした。砂漠に合う植栽といえば、イタリアンサイプレスやケシのようなものばかりで、庭園もそれに合うようなものを造りました。ブラジルの仕事では、金閣寺と同じような納骨堂を造りたいと言われたので植栽をやり始めたら、「ちょっと待ってくれ。そんなことをしたら10年でジャングルになってしまう」と言われ、なるほどなあと思いました。ブラジルは日本人が一番早く移民として移った国らしく、当時も日本人が多かったので割に友好的でした。メキシコでの仕事は割にやりやすかったです。お尻に蒙古斑があるのは日本人とメキシコ人、

モンゴル人だけのようで、メキシコ人は日本人と似たところがありました。

海外で仕事をする中で、国が違えば文化もこんなに違うのだということを知りました。海外に行くと、いろいろなことを吸収することができるので、とても自分のためになりました。経験と体験をいかに上手く蓄積できるかということが、大切だと思います。

第14代目桜守から始まった「桜道楽」について教えてください。

「桜道楽」は、祖父が本願寺・門主の大谷光瑞さんに「時代が進んでいくにつれ、いろいろなものが段々となくなってしまふおそれがある」と言われたことが端緒のようです。大谷光瑞さんが全国のお寺などに紹介状を書いてくれて、祖父が桜の穂木をもらいに南は九州から北は北海道まで歩いて回りました。また、祖父も植木屋だったので接ぎ木の方法などは分かっていましたが、学問的なことは、京都府立植物園の技師である寺崎良策さんに教えてもらったそうです。

当時、私は接ぎ木をしている祖父の周りで握り飯を持って遊びつつ、接ぎ木の真似をして、その方法や適した時期について学びました。そこで蓄積したことが、今の仕事に役立っています。余談ですが、仕事が終わった後に祇園へ行ったこともありましたが、その良し悪しは別ですが、男同士で相談しても男の答えしか出てきません。女性は男性にはない考え方を持っていますので、女性と話をすると違う答えが出てきます。私の経験では、女性は細かい点を探すのが上手です。男性は、輪の中の点を探して、その点と点を繋いでいくのが上手だと思います。男性と女性の違いが上手く組み合わせられれば物事は上手く進むと思うのですが、今の時代は男女平等だといっているのでおかしいと思います。女性と男性にはそれぞれの特性があり、また両方ができることもあるのだと思います。

こういったこともあり、桜道楽をやる中でいろいろな人のお世話になりました。父の時は京都府立植物園が完成した頃です。関口鏝太郎さんという、京都大学の林学部で造園学の講座を始められた方にはいろいろなことを教え

てもらいました。そのお礼に、関口さんが大学の研究以外に自分で調べたいことがあるというので経済的に少し支援をしたり、植物園に植えるものを採集しに行くお手伝いをしたりと、上手く支え合っていました。

昭和9年に祖父が亡くなり、父が家業を継いでからも桜道楽はずっと上手いこと続き、いろいろな活動をやっていました。しかし、大谷さんの「シベリア鉄道を桜で繋ぎたい」という思いのもと、たくさんの苗を育てていた頃に戦局が悪くなり、「桜みたいな阿呆なものをつくるな」と苗をみんな引き抜かれ、食料増産のため芋畑にさせられたこともありました。その時代、その時代にいろいろな出来事があり、いろいろな人に知識をもらいながら、日本各地の珍しい桜を集めて親木を残しています。

これまで関わられた桜の中で、 気になるものを教えてください。

それぞれの桜に由緒と歴史がありますが、中でも一番思い入れがあるのは「太白」です。日本で絶滅してしまった太白という品種の穂木をイギリスから持ち帰り、再び増やすことに成功しました。イギリスから穂木を運ぶ過程には、試行錯誤がありました。はじめは船で送ったのですが、日本に着くとすべて枯れていました。しばらく理由が分からなかったのですが、赤道を通る間に芽が出て、日本に着く頃には真冬になるので枯れてしまったようです。今とは違い、保冷庫もありませんでした。このことに2～3回してから気づき、次はシベリア鉄道で穂木を送ってみたのですが、今度は時間が掛かりすぎることと寒すぎることが原因で枯れてしまいました。最後に、穂木をジャガイモに突き挿して送ってみたら上手くいきました。初めて日本に着いたのは昭和2年頃です。祖父も父もよくこの話をしていました。今の太白は次の世代のものですが、しっかりと生きています。

祖父や父が残してくれた桜の図譜を見ながら「なぜその花ができたのだろう」ということを調べてみると、ほとんどが突然変異であることが分かりました。今は河津桜や陽光といった変わった品種がありますが、これらも突然変異でできたものです。日本にある河津桜は、すべて静岡県の河津駅の近くの農家にある親木から増やして

いるのです。親木は寒桜や彼岸桜が交配したものでしょうと言われていています。桜は自然交配で変化していくので、私も本当に自然の流れに乗ってみようと思い、最近では自然交配種ばかりを探しています。割に、ポコーンと面白い桜が見つかります。京都御苑の山桜もみんな交雑してできたものなので、それぞれ花が違うと思いますが、その中でも石薬師御門に入ってすぐ近くにある桜は、彼岸桜でもないですし、品種は分かりませんが、あの桜の種を蒔いたら面白い花が咲くのではないかと思います。交雑して実った種は、育てても99.9%は先祖返りをしていますが、その中の0.01%は親の遺伝子を引き継ぎます。今は3本か4本くらいの桜に適当に名前を付けて育てていますが、そのうちの1つに少し早咲きで面白いものがあります。三笠宮寛仁親王のお嬢さんである彬子さんが遊びにいらした時、ちょうど初めて花が咲いたので「彬姫桜」と名付けました。今年の12月頃に、とあるお宮さんへ初めて植樹に行く予定です。その時に、「交雑種・自然交配だから母親は分かるけれども、どの木の花粉なのかは分からないので、父親は分かりません。それが自然界というものですよ」と冗談交じりに話そうかと思っています。

花の変化の過程などの記録も全部まとめています。同じ木でも年によって蕊の出方が変わります。調べていると、花びらや旗弁に変化しているのはみんな雄蕊だということが分かりました。雌蕊が突出したものは交配できないので、絶対に種子はできません。1つ1つの花をじっくり見ないと分かりませんが、調べてみると非常に面白いのです。

こんな風に、1人で楽しんでます。面白いものがパカッと出てくる時が時々あります。この楽しみがあるから「道楽」と言うのです。道楽とは道を楽しむものなので、苦労までしてはいけないと思っています。

棟梁として係わられた京都迎賓館の 日本庭園について、お聞かせください。

迎賓館の庭造りは役所仕事なので、まず基本設計に基づいて忠実に造らなければなりません。しかし、1本の木を植え、1個の石を据えることによって、基本設

計どおりに進めることは難しくなります。木も石もみんな自然の形のまま使うので、1個置いたらその形に合わせて次の材料を探す必要があるのです。基本設計になるべく近づけるように気をつけましたが、模様はみんな変わってしまいました。発注元の京都営繕事務所の所長が理解のある方で、基本設計と違ってても了解をもらうことができました。

迎賓館の建設予定地から掘り出された砂利は300～400年前に鴨川が氾濫した時に堆積したもので、これらはすべて利用しました。出てきた石は鴨川や高野川のものばかりで、比叡山系の石は1つありませんでした。これは、白川が京都御苑よりも南で合流するためだと思います。このように、地形の始まりがここで見られた訳です。石類はできるだけ貴船に近い場所のものや、古くに京都に入った地方の石を使用しました。植栽木もできるだけ京都に近い産地のものを使用してくれと言われて、どうしてもなかった木は中国地方から運びましたが、ほとんどは近畿圏内で集めることができました。

仕事では「横文字で物を言うな」と若者に言います。今の時代は「何LDK」や「m(メートル)」など片仮名をよく使いますが、それでは日本庭園を造ることはできません。日本の建物には「間取り」という考え方があり、迎賓館の場合は障子、ふすま、板戸という間仕切りがあります。これに合わせて庭園を造ろうと思ったら、やはりメートル法から尺貫法に直さなければ話が進みません。日本の漢字ほど理屈に合ったものはなく、いかに日本の寸法取りが合理的にできているかということが感じられます。「"m²"は"坪"に直せ。坪という漢字を書いてみろ」と言います。文字通り、土を平らにしたら坪で、土を平らにすれば広さが分かるのです。昔の技術や考え方はものすごいものです。道具も昔のものを引っ張り出して使っています。大きな石を動かす時は箱ジャッキをよく使いますが、今の人は何でも重機に頼ってしまい、箱ジャッキの使い方も知らない人が多いです。「重機が入らないような場所ではどうすればよいのでしょうか？」なんて質問されます。そういった方法も、祖父が昔の職人に教わり、私は祖父に教わった方法です。また、どんな職業にも符丁があると思いますが、それが通らな

くなっています。例えば、土橋の耳の苔は練った土の上に張るのですが、「上手いこと練れよ」と言う。「どの程度練ったらいいのでしょうか？」と言われてしまいます。「どの程度って感覚で分かるだろう」と思うのですが、今は料理でも水や調味料の量を数字で表すので、感覚的なものがあまり身につかないようです。それで、「柔らかく練りすぎたら鼻垂れになってしまうぞ」と言うのですが、今は鼻垂れ小僧がいないので、これもまた分からないようです。「柔らかくて粘り気がある、ちょうどころ加減というのがあっていいだろう」と言っても分からないようなので、「今晚、女のケツを触りに連れて行っただから来い」と言います。本当に触るかどうかは別として、ここで1つのコミュニケーションができますので、若い者の肩の力をふっと抜きながら教えています。そうすることで息抜きができ、やった仕事を楽しめるのだと思います。それから、「休憩はするな、一服しろ」と言っています。「休憩」をすると前の仕事がブツツと切れて、再開しようとしてもまた一からやり直さなければなりません。「一服」というのは、その場で腰を下ろして、これまでの仕事を振り返りながら次の仕事にはどう繋げようかと喋ることです。今、仕事の働き方についてよく話題になりますが、庭師の場合、これだけはやりきらなければならない、という時にはどれだけ時間が遅くなくても終わらせなければなりません。逆に、早めに終わったら今日はもう終わりにしよう、としたい時もあります。稲について調べようと7、8月にバリ島へ行った時、山の方に住む人の様子を見ていたら、仕事をしているのは朝から10時くらいまでで、16時頃に仕事を再開するまでは、ずーっと寝ていました。「一日中働いたら死んでしまいます」なんて言っていました。なるほど、道楽な国だと思いました。小学生は昼頃に帰っているようで、夏休みはあるのかと聞いてみると、「夏休みって何ですか？」という反応でした。「日本では、暑い夏は1箇半月ほど休みやぞ」と言う。「だったら1年中休まないといけませんね」と言っていました。バリ島では新月の時に長期間休むそうです。日本とは違い、普通に年中米をつくっていましたし、自然界で暮らしている人は、上手に自然に合わせて生活をしていました。

迎賓館の作庭は、造園業者5社の混成部隊が当たりでしたが、仕事はそれぞれの部分施工でした。「仕事は1つにまとめてやるものだと言うのに、部分施工なんてできますか」と聞いたら「どうってことないでしょう」と言われました。この時も軍隊での経験が活きました。軍隊では、各々の体格や個性をグーツと見極めて、兵科が決められていました。この仕事でも、一人一人を見ているとそれぞれの得意分野が見えてきたので、ある人には専門の仕事を与えたりして、何とかまとめることができました。また、横文字で言う「オーバーフロー」、私たちは「はしり」と呼ぶのですが、基本設計では水の流れる方向を人工的に循環させようとしていました。しかし、京都の風向きは年間を通じて北あるいは北西なので、それではどうにもなりません。風向きに合わせて流れを持って行けば、落ち葉などのゴミがみんな流れます。それから、「土橋は辰巳の方向に造るべきだ」と言ったら、伝わらなかったこともありました。「京都御所の丑寅の方向は角が切つてあるから見てこい」と言うのですが、それも分からないと言うので、方位計を持って行って説明しました。

日本は仏教と神教が混ざり合ってとても上手く成り立っていたので、京都御苑や御所、戌亥の方角にある乾御門が残っているのだと思います。京都では風向きに合わせて、乾巽張りが一番良いと言われていました。やはり、千年以上のあいだ京都に都があり、こういう文化が繋がっているのだと思います。世の中では「高くとまっている」と言われることがありますが、京都は武家時代が一度もなく、ずーっと皇室があり、公家文化や伝統産業、伝統文化が繋がってきたので、そう見えてしまうだけなのだと思います。

1997年の『ピカソ・メダル』、 1999年の『勲五等双光旭日章』を 受章された際の思い出などお聞かせください。

ピカソ・メダルは、ユネスコ本部にあるイサム・ノグチの日本庭園をずーっと手入れしていたので、そのお礼として与えられたのだと思います。年に1回か2回は少し手入れをしないと上手くいかない時があったの

で、20年ほど手弁当で行っていました。ここでも、日本と海外は違うのだなと思ったことは、日本は書付を大事にする文化ですが、海外はベタッと平らなメダルやカップといった、その物自体が大事だということです。勲五等双光旭日章は書付で、皇居で賞状を頂きました。今までは感じていなかった責任を背負わなければならないな、もう「やんちゃ」はできないな、と感じました。

自分の歳を振り返ると、よく「やんちゃ」をしていたなあと思います。「やんちゃ」というのは「そのへんで止めておけよ」と笑ってすまされるというようなレベルで、いろんな才覚を覚えたりつくったりすることです。「やんちゃ」によって他人の性格を学んでいくのですが、今の教育にはそれがなくて、みんな同じように物事をやらせます。できる者は押さえつけられ、できない者は無理に引っ張り上げられるので、全般的にみんな悪くなってしまうのだと思います。格差ではなく、個性・特性というものを引っ張り出さなければならないと思います。

佐野様の思い出の中で、京都御苑に まつわるものはありますか？

戦時中は、京都御苑でも軍事的な動きがありました。当時、私は京都府立大学の前身の京都府立農林専門学校の学生で、御苑にはよく草刈りに行っていました。草をみんな集めて堆肥をつくっていました。隠すべきことかもしれませんが、戦時中、出征兵士を送る時は堺町御門に集まっていたので、堺町御門にはいろんな人の思い出があるはずだと思います。1917、18年頃、ほとんどの場所が芋やかぼちゃの畑となりましたが、御所はきちつと残されていました。途中からは私も軍隊に行っていたのでよく分かりませんが、今の岡崎や四条烏丸などはみんなアメリカにやられてしまいました。京都御所は別格と見ていたのか、御苑の中や御門は戦後も残りました。

戦後は、今は迎賓館となっている場所でソフトボールが流行っていたようです。その頃から少しずつ御苑の整備が始まり、芝の張り替えや残ったマツの長柄の剪定が長く続きました。マツの剪定をする時は木に登るのが大変なので、一度上がったなら昼も下りずに、木にぶら下

がままお弁当を食べたり、昼寝をしたりしていました。今でも、自分が昔登ったマツを覚えています。堺町御門から入って左側のマツが多かったです。昔の御苑は楽しい場所でした。

京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

京都御苑は、春夏秋冬のそれぞれで、本当にいい場所です。今の人は人間性がきっちり出来上がってしまって、息抜きをするための「何か」を求めていたり、自然に飢えている人が多いので、上手くマスコミを使えば来苑者がだいふ増えると思います。思い切って、御苑のあちこちでハンモックを売ったらどうでしょうか。御苑でゆっくりポカッと一服できる場所をつくったら面白いと思います。蚊に刺されると堪らないので、蚊取り線香も一緒に売ったり、ドクダミには蚊除けの効果があるので、集めてプスプスと燻べて、これが本来の人間の生活だと見せてもいいと思います。御苑という1つの格式は崩さないように気をつける必要がありますが、ビールを売り歩いたり、冬にバーベキューができる場所をつくったり、本当の憩いの場所にしたらどうでしょう。

御苑は、京都の人間にとって命の源の広場です。戦前、草刈りはすべて手刈りで行っていました。刈った草は堆肥の材料になるので、労働力を提供する代わりに草を持って帰るといった形でした。うちでも、やっぱりどんどん草を運んで積んでおき、みんな畑に撒いていました。堆肥をつくる場所は上賀茂の辺りが多く、上賀茂は馬、西の方では牛を飼っていました。馬の足元に草を放り込んで、馬糞と一緒に混ぜて堆肥にしました。自然のものは、自然の中で循環して人間の命をつなぐ、人間も含め、どんな動物でも植物がなければ生きていけません。そういう、本当の大きな自然の姿をずっと繰り返してきたのが、今の京都御苑なのだと思います。また、御苑があることによって、京都の気象条件がきっちり4つに分かれています。今出川通の周辺は相国寺や同志社大学があり、自然の壁がたくさんあるので、真夏に走っても涼しいです。昭和9年に大きな台風が来た時にも、御苑が大

きなクッションになり、御苑の木はみんな倒れてしまいましたが、その北側ではほとんど被害はありませんでした。一方で西側の西陣小学校は押し倒されてしまいました。知らず知らずのうちに、御苑の植物に助けられている部分がたくさんあります。

時代とともに科学的・機械的に生活ができるようになり、自然の流れを忘れてしまってから何だかちょっとおかしくなったように思います。昔の小学校では、子どもをみんな御苑に連れて行き、自由に遊ばせて適当に弁当を食べさせ、適当に小便もさせていたものでした。勉強とは違いますが、御苑では本当の自然の循環を学ぶことができました。今の小学校でも、御苑でもう少し自然の仕組みを教えたら良いのにとと思います。また、他の公園は人為的に造ったものばかりですが、京都御苑には京都独特の地形や御所、他にも鴨川の氾濫や戦時中・戦後の出来事など歴史的な経緯があります。御苑の御門、1つ1つにも意味があります。「御門の高さを見たらその歴史が分かるだろう」とよく人に話すのですが、やはり馬に乗って槍を持ったまま通れるのがあの門の高さである訳で、門から歴史を見て取ることができます。葵祭や時代祭だけではなく、このような面白い歴史を子どもに教えるにも良い場所だと思います。

なぜ京都御苑が維持され、市民に親しまれる場所になったのか、ということを理解することは大事だと思います。

京都御苑の今後について、御意見などございましたら自由にお聞かせください。

昔は公務員と業者のあいだでは、業務のことだけではなく、いろんなことでコミュニケーションをとっていました。「あそこは、あんなにしといたらあかんで」とか「あそこはあしたらどうやろうか」と話したり、雨で現場の作業ができない時には、みんなでワーワーと議論して、植木屋仲間の感覚でした。今は発注された仕様のとおりに業務をこなしますが、目で見えている現象だけを処理して、他に手をつけるべきところがあっても残ってしまうので、かえってバランスがおかしくな

ってしまいます。京都御苑の施策はよく変わるので、くちやくちやになった時やちょっと戻った時、とんでもないことをした時、これらも時代の変遷だと思いますが、樹木は何百年と人のことを見ている。

昭和 29 年に御苑が火事で丸坊主になって以降、今、難しい問題となっているのが大きくなりすぎて石垣を押ししているムクノキ、エノキだと思います。また、カシノナガキクイムシ対策で幹にシートを巻いているようですが、大きくなった木が枯れていかないと次の木が育たないので、逆に良くないと思います。それから、昔の近衛邸跡はもっとマツなどが植えられていて、桜といい按排でしたが、今は桜だけが前面に押し出されているように思います。昔は落ち葉を上手に残していましたが、掃除もやりすぎのように思います。何が一番具合が悪いことかと言うと、時代とともに冬が無くなり、俗に言う亜熱帯性になってきていることだと思います。温暖化によるものなので仕方ありませんが、今までは四季があってあらゆる生物の命が相互扶助関係をもっていました。生態系が変わってしまい、マツがどんどん枯れました。やや冷帯を好むケヤキも悪くなり、温暖な気候を好むムクノキやエノキが大きくなりました。

御苑はちょうど今、松くい虫の被害がほぼ止まり、除伐・間伐の時期に来ていると思います。諸々を考えて、これからの御苑をどうするべきか考えなければなりません。上手く人間が自然の循環と関わり合いを持って、少し手助けをしながら自然の力で回ることを考える必要があると思います。今の御苑は除伐・間伐期の植栽木をほったらかして、被害を与える虫やナラタケモドキのようなややこしい菌が増えている状況です。それから、変に手入れをしたり、変にほったらかしたりしているので、状態の良い場所もあれば、悪い場所もあります。今年もしかしたら大雨や大きな台風が来るかも知れません。枝折れがあって瓦を傷めることはよくあることなので、太い樹はぼちぼち処分していかないと大変なことになってしまうと思います。

行政も大事だから行政マンが大事、技術面も大事だから実務者が必要ですが、この実務者がいません。特に京都御苑は実務者を育てていかなければならないと思いま

す。また、予算は無いのに何かと「京都にはいいものが残っている」と言われます。いい状態を保つためにどれだけ苦勞をしていることか、と思います。一方で、文化財の見学で入場料を取る例があるようですが、文化財は昔の人がつくってくれたものです。それでお金儲けをするのはおかしいのではないかと思います。御苑を管理するためには、建物の工事費とは別に、植物や自然を管理するための多額の費用が必要だと思います。建物の場合も多額の費用がかかりますが、支出は一度で済みます。しかし、植物の場合には、人間が散髪にお金をかけるのと同じように常に費用が必要です。

京都御苑は国の所有ですが、利用者はほとんど京都市民で、京都市民にとって京都御苑はものすごく大きな存在です。これをどのように使い勝手を良くするかということですが、品格だけは残さなければならず、これが難しいことだと思います。今は京都市民の憩いの場にはなっていますが、その前にやはり自然の仕組みが分かり、自然の恵みを人間がもらっているという感覚が得られる場所でなければならないと思います。

2017年6月23日インタビュー

聞き手：田村省二，中西甚五郎，積田真希子

○佐野 藤右衛門さまプロフィール○京都府出身。明治時代から造園業を営む「株式会社植藤造園」の会長。第16代佐野藤右衛門を襲名。桂離宮、修学院離宮などの造園工事に携わるとともに、第14代藤右衛門から続く日本全国の桜の保存活動を継承し、桜守としても知られる。1997年、ピカソ・メダルを授与。1999年、勲五等双光旭日章を受章。著書に『木と語る』（小学館）、『桜のいのち庭のこころ』（ちくま文庫）、『桜守のはなし』（講談社）などがある。